

幼児と音楽



神
礼
子

〈はじめに〉

「幼児と音楽」というテーマは、日頃子どもたちと接触し生活なさっている皆様には、それぞれ関心がおありのことと思います。

☆子どもの情操を高めるためにも、早くからピアノやバイオリンの音楽教室に通わせた方がよいでしょうか。

☆幼稚園の先生になつたけれども、ピアノは下手だしうたにも自信がないので、音楽の指導には困っています。

☆自由に遊んでいる時の子どもたちは実に生き生きしているのに、いざ音楽の時間になると生き生きした様子がみられないのはどうしてなのでしょう。

こんな疑問や悩みをお持ちになつたことはないでしょうか。その答えをさぐるには、人間と音楽のかかわりについて、根本的に

〈音楽というものは果たしてあるのか〉

——芸術から芸能への転換——

一般に音楽とは、「音による芸術」とか「時間芸術」とか言わ

れていますが、人間が音で楽しんでいる時、音以外の要素は関係していないと言えるでしょうか。音と聴覚とを使っていることはいうまでもありませんが、人間には同時に視・嗅・味などいろいろな感覚器官が働いていることを否定できません。

音楽ということば、すなわち「音という单一の情報媒体をつかう芸術」という分析的で抽象的な概念は、文明開化以前の日本にはなかったものです。いいかえれば、西洋文明が輸入されるまで、わが国には“音楽はなかつた”ということです。さらに日本ばかりか、西洋文明圏以外のどの民族にもなかつたのです。

事実、諸民族の芸能をひらく見わたすと、歌、踊り、語りなどの要素を融け合わせて、音楽とも舞踊とも演劇とも名づけようのない渾然としたものへと発展させ、磨き上げていく傾向があります。日本では、「能」や「歌舞伎」のようなものがそれにあたります。こうしたやり方は、人間の感覚系のでき方にあつた、多元的で総合的な情報活動といえるでしょう。

ところが、西洋文明だけはこれに逆行して、純粹芸術主義の名のもとに、情報の伝達を音という单一の媒体のみによつて行ない、もっぱらその媒体を磨き上げていくことをもつて発展の方向としてきました。音楽、演劇、……さらにその枝、葉というように、人間の楽しみを情報伝達の媒体や手法別に切りきざみ、無数

の専門家の手で、その破片のひとつひとつを磨いてきたわけです。この、人間の特性を無視したやり方によつて、どれほど人間が苦労し、楽しみを奪われてきたか計り知れません。

音楽という狭い、分析的で抽象的な概念にとらわれることはもうやめましょう。地球上の民族の生活や芸能に容易に接する機会に恵まれるようになった現在、世界の諸民族の芸能を偏見なく理解し、楽しむ道はすぐ目の前に開かれているのです。

〈樂譜の限界〉

—音楽イコール樂譜ではない—

私たちは、音楽の時間にはもっぱら西洋音楽を教育されてきましたから、樂譜とのつきあいは相当長いわけです。なかには、樂譜をよめないばかりに音楽がイヤになる人もいます。しかし、樂譜をよめることと、歌をうたえることは何の関係もないことです。樂譜をよめない田舎のおじいさんが、その渋いノドで民謡をうたい、聞く人を感動させる事実には誰も異論はないはずです。

西洋音楽では、そのなりたちを考えてみると、その根底に音楽はつねに樂譜に書きあわせるものだという大前提があります。音楽イコール樂譜なのだから、逆に樂譜を忠実に樂器などの“音”

に変換すれば、そこに音楽をつくりだすことができると考えられてきたわけです。

このような変換の可能性がたりたためには“音”的方に次のような条件がもとめられます。すなわち、楽譜で示された音程を正確に再現できるよう、①その高さが人間の耳に明確に判断できること②音色やひびきが高い音の時も低い音の時も、強い時も弱い時も等質のものであること③一つの音の中で高さやひびきや強さが時とともに変化してはいけないこと、です。この条件にかなつたものが“樂音”であり、そうでない（したがつて音譜であらわせない）ものが“騒音”として区別されていることは衆知のところです。

このことは人間の声にあっても例外ではありません。これらの条件をそなえた声として磨き上げてきたものが現在のベルカント発声です。ベルカント発声は西ヨーロッパに土着の発声法を出発点としながらも、先にあげた西洋音樂の体系の要請にもとづいて必然的に生まれたものといえます。

ではこのような西洋音樂の音のモノサンを現実にある音樂のすべてにあてはめることができるでしょうか。例えば日本の尺八の音。これはご存じのようにただ一つの音の中できえ、はげしくたえまなく変化することで言うに言われぬ深い情感をただよわしま

す。このような音の連続的、瞬間的変化こそ、日本の音樂を特徴づけている強力な表現上の武器なのです。

ことに重要な声について考えてみましょう。声は本来、ひびきや高さの点でも、また瞬間的連続的変化においても、樂器の音よりもはるかに思いのままになり、それによつて多様で複雑な表現が可能なことに気づかなければなりません。

ひびきの点でベルカントとは全く異なるニグロのハスキーボイス、装飾音符を使っても書きあらわしにくい日本民謡の小ぶし、あるいは音程のつかみようがない叫び声（叫び声が見事な音樂を作り上げている例は多いが、バリ島の「ケチャ」をきいた人はその人間性と芸術性の高度な融和に驚くでしょう）等、いずれをとつてみても、ベルカント的発想によつてその音の実体のすべてを樂譜という抽象的な媒体に変換することは、不可能に近いと言わざるを得ないでしよう。

このように、樂譜という手段では、言い換えれば、これまでの西洋音樂のアミの目では、現実の音の氷山の一角しかすくいどることができないのです。

「おわりに」

私たちは何のために音樂をし、あるいは子どもと音樂をしてい

るのでしょうか。ごく少数の人を除いては、専門家になるために音楽をしているわけではありません。

今の世の中は専門家社会で、他のことはともかく、ある一面の能力が優れていればいるほど認められるしくみになっています。

音楽においてもこの傾向があり、技術的には幼少時から長時間練習した人が勝ち、技術的にうまくなければ音楽を楽しめないとなると、人間は音楽の練習のためにありまわされてしまします。一日三時間もピアノの練習をしなければならないという状況は、子どもの人間全体としての成長にとって、きわめて不自然で有害なことと言わなければなりません。前にも述べましたように、芸術から芸能へと価値の転換をはかることによって、人間と音楽の好ましい関係を創り出せることを確信しています。

- 〔芸は人間総体のあらわれである〕 芸は人間総体のある一面であり、同時に総体の反映でもあります。一芸にひいでることは、同時に芸以外のその人の人格全体も磨かれなければならない性質のものと言えるでしょう。
- 幼児と音楽の問題を論ずる上で、子どもに接する私たちの音楽観が、子どもに反映することは言うまでもありません。私の実践は、現段階では私と同年代の人たちによって創られています。今後子どもたちの中に入った時、そこからどういうものが創り出されいくかは、先の問題として残されています。
- 参考になる書籍・文献・その他
- 山城祥二 「音楽というものは果たしてあるのか」 合唱団「ハトの会」 第17回定期公演プログラム（一九七三）
 - 山城流口伝控から（そのI） 「ベルカンント脱出の秘策」 芸能山城組「ハトの会」 第19回定期公演プログラム（一九七四）
 - 小泉文夫 「おたまじやくし無用論」 いんなあ・とりつぶ社

○小泉文夫（解説） 「世界の民族音楽」 NHK FM毎週火曜夜
10：20～11：00

（聖マリアンナ医科大学ことばの治療室）
（芸能山城組「ハトの会」）